

歴史を歩く 33

『戦国時代の群像』

第十八話 崩れる肝付と伊東



天正3年(1575年)11月に、肝付兼統の妻阿南が兼護を第19代当主に据え、伊東義祐との決別を島津義久に誓った。一方で、肝付氏の家老である薬丸兼将は、飯隈山別当である救仁郷氏と巖龍寺の住持の2名を日向の伊東義祐のもとに使わり、絶交を申し出た。

伊東義祐にしてみれば、到底この申し出を受け入れられるはずもなく、怒り狂った義祐は使者2名を拘禁してしまった。そして、17代当主肝付良兼に嫁がせていた長女(結婚後、居所の志布志高城より『高城』と呼ばれていた)を引き取るため、12月、河崎駿河守、河崎紀伊守らの率いる1000人(或いは2000人余り)余りの兵を送りこんだ。

12月12日、櫛間に伊東軍は上陸したが、地頭である薬丸兼将は義祐の使者を拒絶。や

むなく志布志へ向かうが、ここでも受け入れられず、波見まで来て交渉を求める。しかしここでも肝付家臣によって拒否されてしまった。とうとう12月23日に河崎紀伊守が残留して高城の返還を強く訴えた。交渉の末、天正4(天正6年(1576)1578年)の頃に、高城は実家に引き取られることになった。しかし、この時すでに伊東家が日向を追われていたため、高城は都於郡照覚院に隠棲することになる。

天正4年(1576年)8月、島津義久が伊東四十八城の一つである高原城を攻めた。圧倒的な兵力の前に、高原城は陥落する。この時、肝付兼護も島津軍として三百余りの兵を率いて参戦していたが、全く戦う様子を見せなかった。このことで島津氏は、兼護が伊東氏との関係を絶っていないと疑念を抱いた。

そこで、兼護は10月1日に、志布志地頭 肝付兼名、大崎地頭新納永看、薬丸兼将、肝付兼隆、肝付兼種など、肝付家総力を挙げて、飢肥の伊東氏に攻め込んだ。しかし、大敗を喫して福島にたてこもった。この時薬丸兼将、新納永看らが討ち死にした。

この肝付氏による伊東氏攻めには、このような逸話がある。

長年にわたって、肝付氏の盟友である伊東氏を攻めるのは忍びないと思つた薬丸兼将は、密かに伊東義祐に手紙をしたためた。その内容は、「島津氏には逆らえないが、伊東氏とは戦いたくないので、殺傷能力のない武器で、お互い戦をしているフリをしましょう。」といったものであった。伊東義祐からもその計略に乗る旨の返事があり、密約がなされた。

しかし、見せかけだけの戦であったはずなのに、伊東軍から肝付軍に打ち込まれたものはすべて実弾であった。伊東氏は密約を破つたのである。

この戦いにより、大崎を守っていた島津の将鎌田政近は福島

に援軍に向かった。島津以久も大隅から福島に援軍を率いて向かった。そして、勢力を完全に失ってしまった肝付氏の領土は、高山を除いて、すべて島津氏の属するところとなった。

天正5年(1577年)、伊東方の武将が相次いで島津に降伏をするようになる。往年の伊東家の繁栄を背景に、栄華驕慢の日々を送っていた伊東義祐であるが、島津との決戦の段階でも優雅な暮らしから抜け出ることではできなかった。また、自分に都合のいい家臣だけを側近にしていたため、すでに義祐の求心力は完全に失われてしまった。12月9日、日向に自身の行き

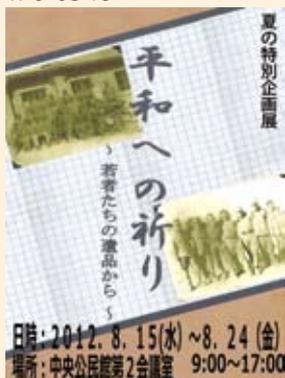
場を失った義祐は日向を捨て、150(200)名の一族を連れて豊後国の大友宗麟のもとに落ち延びることにした。この一族の中に、後に天正遣欧少年使節の一人としてローマに派遣される伊東マンシヨがいた。

天正5年の頃、島津氏による領地整理で、新たに大崎地頭が配置された。『大崎名勝誌』や『三國名勝図会』によれば、比志島美濃守国守という人物が任補されたとなっている。

国守はこれまでの大崎城(龍相城)を捨て、現在の馬場に新たに大崎城を築城した。(大崎町教育委員会 内村憲和)

夏の特別企画展のお知らせ
平成24年8月15日(水)～24日(金)の期間、中央公民館第2会議室におきまして、夏の特別企画展『平和への祈り～若者たちの遺品から～』を開催します。戦争史とともに、その中で戦死した兄弟が遺していたものを中心に紹介

問 大崎町教育委員会 社会教育課
☎ 476-0548



日時: 2012. 8. 15(水) ~ 8. 24(金)
場所: 中央公民館第2会議室 9:00~17:00